

メトアナ配合錠:投薬時チェックシート

まれに重篤な乳酸アシドーシスを起こすことがあり、死亡に至った例も報告されています。禁忌等に注意をして、投与してください。

禁忌チェック

チェック項目	禁忌
乳酸アシドーシスの既往	あり
腎機能障害	重度・中等度
透析(腹膜透析を含む)	あり
肝機能障害	重度
ショック、心不全、心筋梗塞、肺塞栓等心血管系、肺機能に高度の障害、その他の低酸素血症を伴いやすい状態	あり
過度のアルコール摂取	あり
脱水症、脱水状態が懸念される下痢、嘔吐等の胃腸障害	あり
重症ケトーシス、糖尿病性昏睡又は前昏睡、1型糖尿病	あり
重症感染症、手術前後、重篤な外傷	あり
栄養不良状態、飢餓状態、衰弱状態	あり
脳下垂体機能不全、副腎機能不全	あり
妊婦又は妊娠している可能性	あり
本剤の成分又はビグアナイド系薬剤に対し過敏症の既往歴	あり

以下の臨床試験の除外基準の値を目安とし、**血液検査や尿検査のほか、患者背景、自他覚症状なども考慮**してください。

腎機能 腎機能障害を有する患者	投与前の血清クレアチニン値(酵素法)が 男性▷1.3mg/dL以上 女性▷1.2mg/dL以上
肝機能	投与前のAST(GOT)又はALT(GPT)が各測定機関の基準値上限の2.5倍以上の患者、肝硬変患者

メトアナ配合錠:投薬時チェックシート

次の状態では、乳酸アシドーシスを起こしやすいため、投与継続／中止／休薬の判断、投与量の調節を行ってください。

腎機能 定期的に検査を実施	<input type="checkbox"/> 臨床検査値の異常 (eGFR、血清クレアチニン値など) <input type="checkbox"/> 腎機能を悪化させる要因: コード造影剤の使用、腎毒性の強い抗生物質の併用など
肝機能 心肺機能	<input type="checkbox"/> 臨床検査値の異常 <input type="checkbox"/> 低酸素血症を伴いやすい状態 (心肺機能)
患者さんの 状態など	<input type="checkbox"/> 過度のアルコール摂取 <input type="checkbox"/> 脱水所見 <input type="checkbox"/> シックデイ (下痢・嘔吐・発熱等) <input type="checkbox"/> 食事・水分摂取不良 <input type="checkbox"/> 手術

高齢者への注意

定期的に、特に慎重な経過観察が必要な場合には、より頻回に腎機能や肝機能を確認するなど慎重にご使用ください。

腎機能や脱水症状など、患者さんの状態に十分注意して投与の中止や減量を検討ください。

75歳以上

乳酸アシドーシスが多く発現しており、予後も不良であることが多いため、投与の適否をより慎重に判断してください。

乳酸アシドーシス	対処例
血中に乳酸が蓄積する結果、血液が著しく酸性に傾いた状態です。(血中乳酸値:5mmol/L(45mg/dL)以上、血液pH:7.35未満) 初期症状:胃腸症状(悪心、嘔吐、腹痛、下痢等)、筋肉痛、筋肉の痙攣、倦怠感、脱力感、腰痛、胸痛	メトアナ配合錠の投与中止 血液透析、輸液による強制利尿(メトホルミン・乳酸の除去) 乳酸を含む輸液は使用不可。 炭酸水素ナトリウム静注 アシドーシスの補正。 過剰投与によるアルカローシスに注意が必要。pHが低い場合に適用を考慮し、慎重に投与。 乳酸アシドーシスの原因となるような疾患・病態を有する場合には、その疾患・病態を是正するための適切な処置を行ってください。
低血糖	対処例
<input type="checkbox"/> 交感神経刺激症状 発汗、不安、動悸、頻脈、手指振戦、顔面蒼白など <input type="checkbox"/> 中枢神経症状 頭痛、眼のかすみ、空腹感、眠気(生あくび)などがあり、50mg/dL以下ではさらに意識レベルの低下、異常行動、痙攣などが出現し昏睡に至ります。	<input checked="" type="checkbox"/> 経口摂取可能な場合 ブドウ糖(10g)またはブドウ糖を含む飲料水を摂取させてください。 α-グルコシダーゼ阻害薬服用中の患者では必ずブドウ糖を選択してください。約15分後、低血糖がなお持続するようならば再度同一量を飲ませてください。 <input checked="" type="checkbox"/> 経口摂取が不可能な場合 ブドウ糖や砂糖を口唇と歯肉の間に塗りつけ、また、グルカゴンがあれば1アンプル(1mg)を注射するとともに、直ちに主治医と連絡をとり医療機関へ運んでください。1型糖尿病患者ではあらかじめグルカゴン注射液を患者に渡し、その注射方法について家族を教育しておくことが望ましいです。
消化器症状	
最も頻度の高い副作用であり、投与初期や増量時に認められます。低用量から開始し、個々の症状に応じて増減することで対処が可能であると考えられますが、下痢等の症状により脱水に至る可能性もあり注意が必要です。 服薬指導時に一日に複数回、水様便状の下痢を起こした場合や激しい嘔吐を起こした場合、医療機関へ連絡するようにご指導ください。あるいは、下痢がおさまるまで服薬を休止するような指導が重要です。	